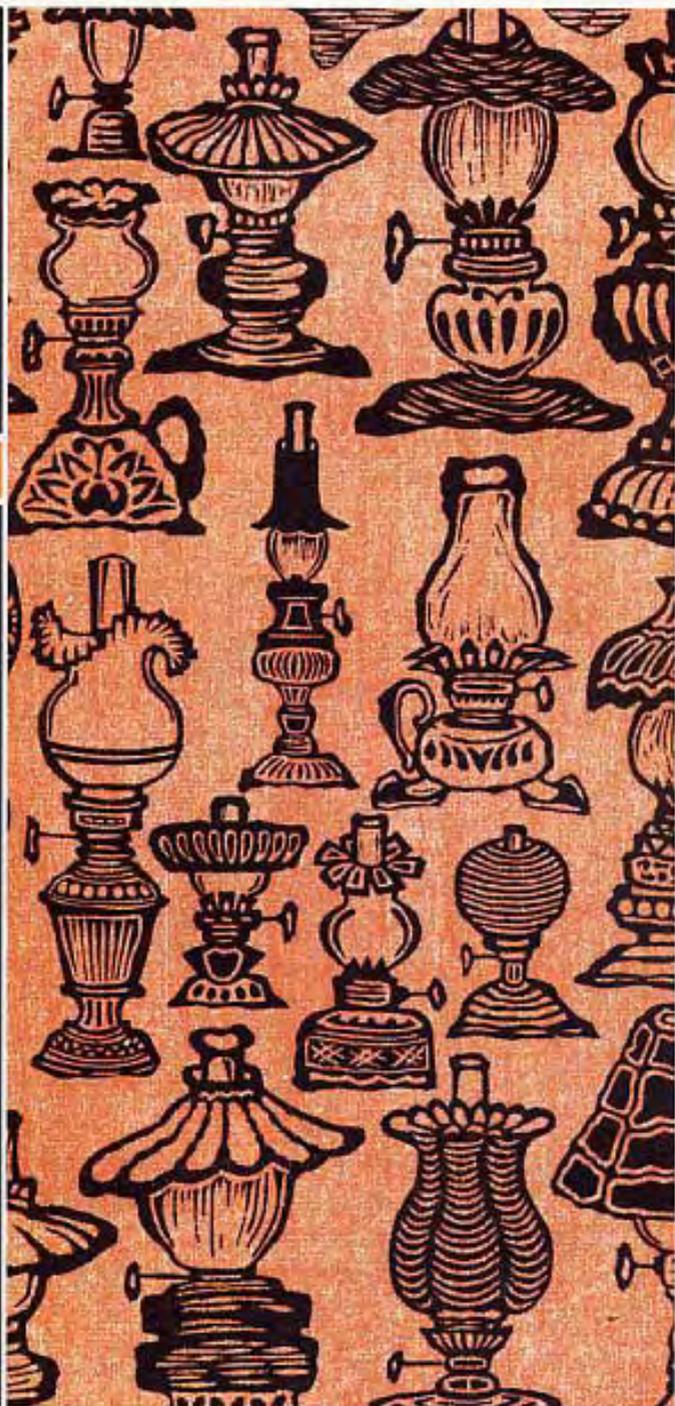


春日燈

2
月号

FEBRUARY 2007



久保田万太郎の句

せりあげのなりものいま初芝居

『久保田万太郎句集』 芝時代Ⅲ 昭和十七年

劇場の席に着くと、必ず掲句が口をつけて出る。たとえ「せりあげ」のない演目であっても、口ずさむとわくわくして来るから不思議だ。俳句は「今、眼前」を詠うのだから「今」は不要、無駄と聞かされる。しかしこの「いま」の切しは、主人公が舞台で見得を切る瞬間と同じなんだと、ひとり納得している。掲句を知ってお芝居が断然楽しくなって、半世紀以上が過ぎた。

橘 正義

久保田万太郎の句

冬の灯のいきなりつきしあかるさよ

『久保田万太郎句集』

この句「いきなり」が効いている。「冬の灯の」で辺りをじつと窺い、「いきなりつきし」で左右の数人を斬捨て、「あかるさよ」ではつと懐紙を放り投げる、新国劇のお株を逆取りのリズムである。戦前の新生新派と新国劇とは演目も客層も全く対照的で、それぞれの代表格万太郎氏と俵藤丈夫の仲は、決して良いとは言えなかった。それが今では息子の私が春燈のお世話になっている。

俵 藤 正 克

西ヶ原日記 (二七)

鈴木榮子

ふる里を東京として都鳥
初場所の番付張つて鬣肩なし
百八つの除夜の一打に馳せ参ず
古地図にある寺なり除夜の鐘撞きに
行司の子関取の子も卒業す

葉研堀の塾冬休み自転車好き
下町は都立受験や卒業す
水鳥の二羽相寄るは鴛鴦ならむ
秀吉を嫌ひ高きに登りけり
琵琶湖秋周航デッキ派キャビン組
宿坊のゆふべの膳のきぬかつぎ
飲み残すきつねの蕎麦湯鳩の湖

冬 霞

長谷川友子

白鳥の来たりて山河整ひぬ
草原の果ては荒海雁渡る
実はまなす砂の起伏に風が棲む
鱸綱の伸びては縮み冬が来る
漁具雑具石を重しに漁終ひ
冬将軍居座つてゐる船溜り
子らの膝揃ひ父待つきりたんぽ
男来て帆柱に結ふ松飾り
捨て船に雨水溜まる多喜二の忌
寒や子を蒙古来るぞと寝かしけり

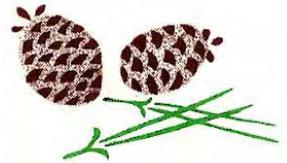
阿波の冬

白杵
游
児

衛鳴く淡路島よりわたる阿波
冬の潮重く流るる鳴門かな
四国三郎対岸かくす冬の霧
箱を出る木偶と御慶を交しけり
冬菊やうだつの並ぶ藍の町
南国に三尺の雪剣山
夜咄の舌にとろける和三盆
化けて出る阿波の狸に寒施行
無医村に爺の出番の寒灸
風花のしきり四国の臍はここ

当月集

鈴木 榮子選



○ 荻野嘉代子

誓子句碑濡らし馬籠の時雨れけり

円空仏の木目露や冬麗

拌み来し仏かたへや冬茜

一葉の洋髪写真返り花

古曆父母の忌残すばかりなり

○ 生方義紹

石仏の頬のゆるびや山粧ふ

栗飯や忘れしひとのあまたなる

秋灯電話のベルの闖入す

冬めくや引つくり返す砂時計

糟糠の妻の物干石路匂ふ

○ 廖 運 藩

秋あはれ喜寿相応の笑ひ皺

朝寒の草葉が濡らす牛の鼻

托鉢の経文テープや彼岸花

コスモスや冠木門附きの九尺二間

秋懷や供華綿々と六氏塚 （俳諧掬れし呆教師の墓）

○ 陳 錫 恭

深読みをしないでおくれ落し文

いつか読む切り抜き溜めて夜長人

シヨウウインドーの「考へる女」秋深し

烏竜茶に駄菓子合ひて一葉忌

理通すは不得手ぞなもし漱石忌

○ 久保久子

鐘撞いて比叡ふるはず冬初め

白菊の筋をとほして枯れにけり

依編む日の香土の香身に纏ひ

冬耕のこころの裳をほぐしけり

寄せ鍋や無造作といふあたたかみ

春燈の句

鈴木 榮子選

朗々と婚の祝詞や神の留守

三重 上野 進

鍋沸いて鮫鰯の肝移植さる

寝返りて楷火つぶやく自づから

湯豆腐や酒が持葉の万太郎

軽やかに法被地下足袋老菊師

小春日や明治廐舎の赤煉瓦

石路の黄や宿のパティオを明るうす

土付きの大根積まれ農業祭

手袋に母の形の残りけり

失敗を笑ふ電話や冬ぬくし

わが影の障子にうつり「つう」に非ず

事無きをよしと心得年送る

照りかげる永遠の墨跡一葉忌

菊坂や一葉の井戸片時雨

截金の細工の妙や冬日燦

み仏の截金びかり冬の暮

隣家よりまたまた届く鯉大根

煮大根の齡重ねし味なりけり
椀の花の香しるき裏鬼門

残高の合はぬ家計簿枇杷の花
産院を閉ざす貼り紙石路の花

赤提灯に風の繰り言おでん酒

冬夕焼呑むべゑ横丁荘厳す

狐火を語る古老の赫き鼻

竹の春ひとり身気丈に生きて来し

友迎ふ赤きゲートや冬うらら

秋麗の流れに任す小さき舟

子等の来て過去取り戻す良夜かな

天高し故宮に入れば天下は清

千屈菜や香煙絶えぬ廟祭煙

稲光第五の響きに身構へり

姫胡桃軽重問はず割りにけり

逸品の翠玉白菜残る虫（台湾四句）

衛兵の銃剣冬日を返しけり

日短や千の灯明千の香

阿美族の衣裳の綾や冬ともし

重ね着や老いては老いの冬構

飾壳競ふ口上与太も入れ

神奈川 金子 輝

台北 陳 妹蓉

台北 呉 文宗

東京 今井 弘雄

東京 増田 大

兵庫 伊藤 百江

神奈川 松波とよ子

東京 久永 淳子

大阪 中上 馥子

余言

鈴木 榮子

一葉の洋髪写真返り花

祖母によく似し一葉の忌なりけり

荻野嘉代子
布川 玲子

一葉の新しい記念館が竜泉寺に出来た。喜ばしいことである。一葉も天才ですねーと何げなく安住先生に申し上げたら一葉はーと直された。さりげない会話の中でも先生から沢山のことを教えて頂いた。私だけではなく春燈の方々はみな経験があるはずだ。

一葉の洋髪の写真はまだ見たことはないが拝見したいものだ。春燈の投句の中にご自分の祖母が一葉に似ている、という句があったが、実は私の祖母も明治六年生れで、若いころの写真が一葉と似ているとかねがね思っていた。一つの時代の雰囲気なのかも知れない。

乗り継ぎて旅のはじまる浮寝鳥

佐渡谷秀一

十一月二十六日(日) から二十九日にかけて三泊四日で春

燈台北支部を訪れました。頼天河様、陳継森様以来二十数年の台湾台北支部訪問である。

台北の方々は誌上でご覧の通りの佳吟で、当日五句出しの五句選で台北の方が特々選だった。

別頁にその経過は出ているのでご覧下さい。

電車の乗継ぎはあるが飛行機の乗継ぎは始めてだったので心が華やいだ。

台北という台湾の北から台湾の南高雄へ飛んだが、短い日程でよく動きまわった。

深読みをしないでおくれ落し文

陳 錫恭

なんと洒脱な心憎い句ではないか。日本国の男性は顔負けである。陳氏七十代の男性であるが、台北の三人の男性、および女性も中々のインテリで頼もしい限りである。

礼節の国の方々は昔の日本国の人々のようで、奥床しく優しく、なごり惜しい思いで帰国した。

ななかまど燃えて奈落を深うせり

瀬戸 峰子

ななかまどの燃えるような紅は寒い地方であれば一層鮮やかである。

函館の坂の上でこれぞ紅葉ていしやうという濃く強く、晴々しいななかまどの紅葉を見た。

旅先のことであつたから一層眼に焼きついて、今でもその季節になると思い出す。